博物館学雑誌第2巻第1・2号36〜42ページ，1977年3月

博物館展示の教育的効果

On Educational Effects of Museum Exhibits

芳　井　敬　郎※
Takao Yoshii

はじめに

博物館が多くの公衆の利用に益する機関であるという認識に立つ場合，入館者の反応は，重要なものとなってくる．またその反応を分析し正しく把握しないかぎり，博物館活動は，企画側（博物館側）の一方通行的なものとなるであろう．

さて，その反応を把握することは容易なことではない．なぜならば，博物館の利用者は不特定層であり，その各層からの情報を収集した上でないと分析作業が不可能のためである．

まず筆者は，そのうちでも比較的情報の集めやすい小学生層から試みることにした．この作業は，小学生でも学習できるよう開館当初より種々考慮した筆者の所属する館（奈良県立民俗博物館）にとって必要であることはいうまでもない．

そこで本稿ではさきに当館の教育的配慮を報告した上で，子供の反応を論究したい．

I

昭和49年11月に開館した奈良県立民俗博物館は，大和郡山市矢田町に所在する民俗公園のなかにある．この公園は，自然の景観を生かした整備とともに，そのなかに奈良県下の古民家の移築を成しつつある．現在民家は2棟復元され，野外展示物となっている．ゆえに来館者は，公園をも利用することができる．

博物館では，諸活動を実施しているが，やはりそのなかで展示が主なるものとなっている．

展示はオープン時に以下の内容で企画した（図1）．

①奈良盆地の稲作（「稲作」コーナー）
②吉野山地の林業（「山の仕事」コーナー）
③大和高原の茶業（「大和のお茶」コーナー）
④大和の民家（三面オートスライド）
⑤その他（「日々のくらし」コーナー）

上記した各コーナーの概観を述べると，①では，奈良盆地（国中）の代表的生業である稲作の全作業工程を，民俗資料とその使用方法を示すパネル等で解説してい

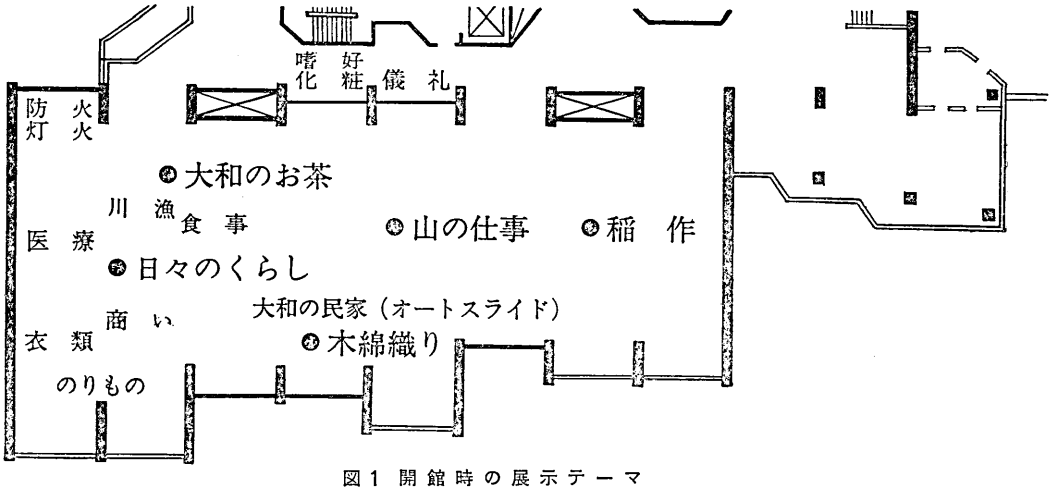

図1 開館時の展示テーマ

る．②では，奈良県の約6割をしめる吉野山地の林業をとり上げ，その植林から伐り出し，運搬・加工までの作業のようすを生態的な展示法でみせている．また③では茶の産地である奈良県北東部（大和高原）で行なわれている製茶工程を通じて民俗資料と人々のかかわりを展示している．④は，民俗学の方で問題となる地域性をあきらかにするため，奈良県下の各地の民家を，地形とからめて三面オートスライドでみせている．⑤では，収蔵資料を陳列し，過去の日々のくらしぶりをあらわした．そのなかにふくむコーナーの内容は図1に示すとおりである．

①から③までは，ストーリー性のある有機的展示法を用い常設展として今日でも観覧できる．また④は，③までの展示法と異なり，従来から他でみられる陳列法を採用し，開館までに収集した資料を多く観覧できるよう配慮した，いわゆるオープン展である．この陳列場は，当初の予定どおり今日ではテーマ展（いわゆる特別展）の会場として利用している．

以上が展示内容の概要であるが，次にそれらの展示を企画するうえで観覧者へどのような配慮に立って行なったか述べることにする．それを列記すると以下のようになる．

①フレキシブルな展示法
②動線の単純化
③図パネルによる解説
④展示の立体化
⑤映像資料の採用
⑥体験学習の実施
⑦その他

①の考えに基づいて図1に示すとおり，展示場は小部屋形式をとらずに，1つの空間にすることを建築家に依頼した．それは，将来の展示替えの際の占有面積を自在にしたいと考えたためである．それにともない展示の諸備品もほとんど壁面や床に固定せずにフレキシブルなものとした．ゆえに展示を構成する壁面パネル・展示ステージ・ケースそれにジオラマとも一部を除いて作りつけのものはない．この方法を採用したことにより，既存展示を入館者の声に基づいて改善することや，調査研究の新しい情報によって補充することも可能である．

②で，観覧者が自然に展示場を歩けるように考えたため，ストーリー性のある常設展示場のなかでは中央フロアーの展示の扱いに充分考慮した．なぜならば，中央フロアーに展示した場合（俗にいうシマ展示），観覧者はどう歩行しどの展示部分と結びつくのかとまどうことが多い．そこで，常設展示場ではその展示法をなるべくおさえ，「日々のくらしコーナー」では，1つのシマ展示の内容が他の展示部分と関係のないように取り扱った．ゆえにシマ展示を排した常設展示場に入れば，いささか殺風景の感を入観者は持つかもしれないが観覧者への配慮のためにはいたしかたない．

③では，あまり予備知識や体験の少ない小学生でも展示物を理解できるように考慮した．図を利用して解説する仕方は，従来の博物館でも試みられているが，当館は常設展示場すべてにそれを適応させた．それで，観覧者

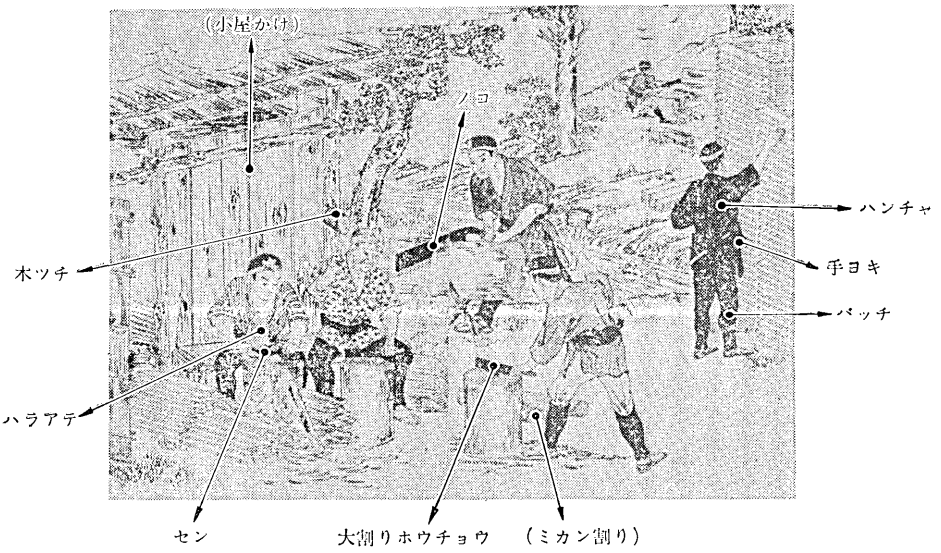

図2 展示パネル「樽丸づくり」

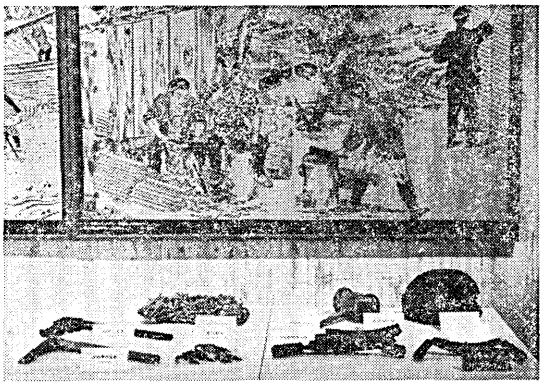

図 3　展示のようす（「山の仕事—木の加工」コーナー）

はまず前に並べた民俗資料を見，次に壁面パネルの線描画ないしは写真でその使用状態を理解できるようになっている．線描画のパネルとして好事家の書きためていた絵日記をもとに模写したり，奈良県下に残る大正期の殖産啓蒙書の挿画を利用した．展示に際して画の裏付け調査を行なった上でパネル化したことはもちろんである．またパネル写真は今日でも展示資料と同じ道具を使用されている方を見つけ，その使用風景を撮影したものを使った．もうすでに使用が絶えてない場合には使用経験者に状況を再現してもらい，それをフィルムにおさめた．

1例として，「山の仕事コーナー」のパネル図（図2）を上げる．その展示部分（図3）は①で述べたとおり，壁面パネル展示ステージで構成されている．向って右側の展示ステージにのせたものは「樽丸道具（樽・桶の側をつくる用具）」であり，後面にみえるパネル図はその道具で作業する風景である．後述で論考する小学生の作文のなかでみられるとおり，子供達はものを見れば，まずかたちと用途を考える姿勢がみられる．そのことは大人も同様であろう．そこでステージの樽丸道具を見ればかたちの追求ができ，次にその使用風景の図で用途の理解は可能となるであろう．また同図はそれだけにとどまらずいろいろなことを教えてくれる．まず，山で小屋がけをして作業するということ．それから，山に倒した木材を小切りからはじめ，その木をミカン割りにしさらに小割しそれを均一な厚さに削り上げて，セイロ形に積み乾燥させるという手順や，働く人々の服装等までわかる．ゆえに観覧者はその使用道具類を有機的な結びつきのなかで理解することができるであろう．また，図をみせることによって用具等の解説文は短かいものとなり，観観者の読解に対しての負担は少なくてすむ．

また，ジオラマ風に立体化された部分もあるので③と

図 4　展示のようす（「山の仕事—木馬出し」コーナー）

してあげた．これは展示品の理解のために②の考え方を1歩すすめたものと考えてよかろう．その例として上げる図4は(木馬出し「木材をソリに積んで搬出する作業)」の展示状態の1部であるが，このようにその作業風景を再現してそのなかで使われる道具を有機的に見せるようにした．もちろんこれも実際に木馬だしを経験した人々の力を借りたことはいうまでもない．展示場で再現するのに誤りのないようにそれらの人々を館に招聘して，材木をソリに積み，綱をかける作業や人形の表情の決定等実際にお願いした．

⑤の考え方に基づいて前述の三面オートスライド「大和の民家」を製作した．最近は映像時代といわれるほどテレビ・8ミリ等の映像器具の普及はめざましい．それは，使用効果の大きいことに由来すると思われる．その効果として第一に短時間に相当の内容を印象づけられることが上げられる．「大和の民家」の内容は前に述べたとおりであるが，ここで観覧者に常設展示で理解した3つのテーマをもう一度復習させる意図があった．それはスライドで取り扱う民家と地形，それに3つの生業を関連させ，どれもはっきりと理解させることである．しかし映像のあたえる強烈な印象は観覧者の思考をとめかねな

図 5　体験学習講座「ゾウリづくり」

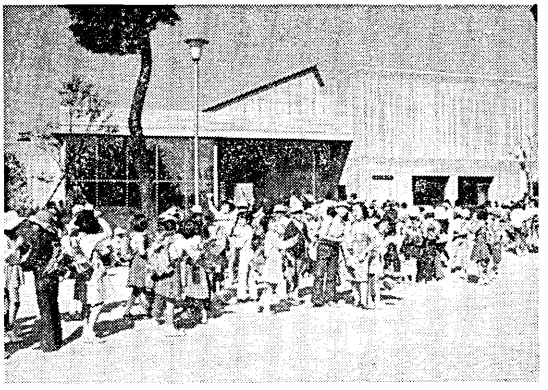

図 6　小学生の校外学習

いのでスライド製作は慎重に行なった.

⑥は展示の限界をふまえた上で企画した. 人間の営みを展示で表現した場合どうしても静的なものになり, 人間関係のなかにみられる人情感は理解しにくいものである. そこで, オープン時より毎月第4日曜日に「体験学習講座」(図5)を実施している. この講座は「ぞうりづくり」「竹かごづくり」等の内容で, ものの製作を通じて実体験ができるようになっている. また, 講師として招いたお年寄りから製作方法の指導と合わせてむかしのくらしのようすを話してもらうようにも配慮している. おそらく, 参加者はむかしのようすを自分なりに認識して帰っていくことだろう.

また上記以外の配慮として種々上げることができる. たとえば, 検索台の設置である. この台に学芸員の探訪してきた民俗に関する情報, また他で発表された奈良県下の民俗文化についての報告をファイルし, おとずれる学者・学徒に閲覧してもらうことになっている. それから, 前回の特別テーマ展の一部を展示するコーナーも設けている.

以上で博物館の展示テーマの内容とそれを観覧する人人への配慮を述べたつもりである. 次にいろいろもくろんで構成した展示を, 小学生はいかに理解したか明らかにしたい.

II

当館に校外学習としておとずれる小・中学校は年々多くなっている(図6). その受け入れは, 原則として以下の手順で行なっている.

①引率教員の事前見学と学芸員との話しあい

②館で作成した『博物館利用の手びき』の配布

③各担当教員によるH・R等での事前授業

④来館した生徒を前にしての学芸員の展示概要の説明

ゆえに, 子供達は以上要請した事前の学習と, 郷土を取り扱う平常の社会科学習より得た予備知識を持っておとずれていると考える.

それならば, 学校の授業(社会科)のなかで民俗資料(むかしの道具類)は, どういうようにあつかわれているだろうか.

3年では「自分たちの市(町村)の特色について考える」学習がなされ, そのなかでむかしの生活用具が取り上げられている. たとえば奈良市教育委員会編の副読本『わたしたちの奈良市』のなかでは, 「くらしと楽しみ」という項に「むかしののう具」と題する写真をつけて掲載されている. その本文には「近所におられるお年よりに, むかしのくらしと, 楽しみのことについておたずねすると, つぎのように話してくれました.

米をつくるのに大へん苦ろうしました. 田植えがすむと休むまもなく, 田をたがやしたり, 草とりにいかねばならないのです. 農具(のうぐ)もかんたんなもので, おもに自分の手や足だけを使ってするのですから, 夏のかんかんでりの中を, どろんこになってはたらくのはつらいでした」と記している. それについての指導案(奈良市教育委員会・奈良市教育研究室編『小学校社会科指導計画資料集』)では「祖父母や町の古老などから昔のようすや, その頃の人々の仕事やくらしについて聞く」と民俗学の基本である採訪の必要を説き, 「古い道具と新しい道具と新旧の比較だけにとどまらず, 古いものから新しいものへとうつる間の時代の推移と人々のくふうや努力についても, つかませるようにしなければならない」と指導上の留意点を記している.

また4年生では, 3年で学んだ「じぶんのまち」と比較できるように, 「奈良県のかく地のようす」を学習す

る．そのため，奈良県郷土教育研究会編『わたしたちの郷土　奈良県のくらし』がテキストとして利用されている．そこではとりたてて「道具」について学習する単元はみあたらない．しかし，当館の常設展示と関連する事項は多くみつけることができる．同本の「奈良県の各地のくらし」の項で「奈良盆地の米づくり」「大和高原―米と本」「吉野林業」がとりあげられている．ゆえに小学生は相当知識を持って来館していることがわかる．またそのことは後述する作文からも推察できる．

さて，実際に小学生達は展示物についてどのように理解し，また，どう考えたか彼らの感想からあきらかにしたい．

ここに取り上げる感想文は，T小学校4年生1クラスのものである．T小学校は奈良盆地の北西部にあり，主に農業に従事する家庭の子供達が通学している．

まず，ある子供の作文の1部分を載せ，それを考察しながら論をすすめたい．

> 博物館に置いてある道具を見て“たいへん昔の人たちは苦心していろんなものを作ったんだな”ということがわかりました．
>
> また今とくらべて“昔のくらしぶりはたいへんだったんだな”ということもよくわかりました．
>
> たとえば「いかだ流し」
>
> 川を利用して木とかを運ぶんだけれどもいくら人が“かじ”をとってももし川のがけや岩にぶつかったら…….
>
> こんなことを思うとたいへん“きけん”な仕事だったんだなと思います．
>
> それにくらべて今は陸路で運べる様になったし，トラックや車でごくかんたんにどんな遠い所まででも運べる様になったことから私たちは昔の人たちにくらべてたいへんゆたかなくらしなんだなということが身にしみました．
>
> 春休みには博物館で見たことを参考として勉強したいと思います．（原文のまま）

上の文章ですぐ気づくのは，子供は常に現代とむかしを対比して考えていることである．また学校でもこの見方で，授業がすすめられていることは，前に引用した指導案よりあきらかである．また成人においても展示物を見た場合，まず今日のものとの比較からはじめるのではないだろうか．

前掲の作文のなかで子供は展示場のイカダの模型に注目してその仕事内容や利用形態を考えたのち，「私たちは昔の人たちにくらべてたいへんゆたかなくらしなんだ」と結論を述べている．そこで使われている「ゆたか」という表現は一見不適当と思われるが，子供にとっては一番適格ないい方であったろう．おそらく子供はこの言葉で複雑な思考をいいあらわしたつもりである．むかしのイカダ流しの作業は陸送のトラックに比べ「危険」であり，たいへん「苦労」を要することから，肉体的労働の軽減化，安全化を問題としてとり上げることの多い現在を「ゆたか」と表現したと思われる．他の子供たちの感想のなかでも今と比べ昔の作業は「危険」・「重労働」であることを記述している．

また，展示場でむかしの作業のようすをみて「不便」と述べている子供も多い．ある子供は「むかしの人たちのくらしは不便だったんだなあ」と感想をもらしたのち，「（むかしは）手や足でやっていたのが（いまは）きかいでしてくれる」と昔と今を「手仕事」と「機械生産」の対比でとらえている．そのことを感じた子供は他にも多い．しかし，不便であることを知りながら，ある子供は，「稲作コーナー」の「トウミ」の使用図解のパネル（図7）を見て「重い物や軽い物，かすなどをよりわけるしくみ」になっていることを理解し，「昔は機械はなかったけれども，それを頭が助けたといってもいいぐらいと思います」といささか文意が通じないが，ようするにむかしの人々の工夫のあとに感心している．まだ，この感想と似かよった文章をみつけることができる．ある子供は「昔の道具には電気ではなく，人たちで考えだしたことが多かった」とこれも文意はくみとりにくいが古い道具を見て人間の考案によって生まれたことを強く感じている．しかし一方今日の機械には人間とかけはなれたものという意識を持っているのではなかろうか．ようするに機械も人間が考案したことを子供達はすぐに想起できないのである．

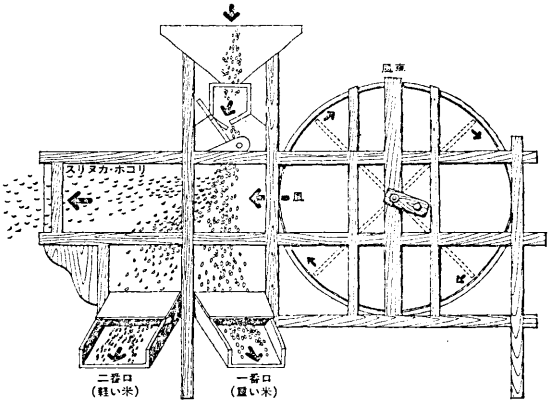

図7　展示パネル「トウミの構造」

展示物へ興味を示した文章はまだ見つけることができる．とりわけ「置階段」(「箱段」) には多くの子供が関心を持っている．これは子供達が来館した当時(51年秋)小テーマ展「調度―むかしのインテリア」に出展していた，主に商家でみられる移動可能な物入れ付きの階段である．これについて「かいだんにひきだしやドアがあるのでおもしろく思い」また「横に引き出しをつけるのがくふうしてあると思った」として階段内部の空間をうまく利用したことに感心している．またちがった角度からみて「むかしのかいだんの方が急で高い」ことや「今のかいだんにくらべて昔のかいだんが半分しかなかった」ことを感想として述べている．

以上子供の記述からわかるとおり，階段自身の形態については充分理解している．しかし，その用途面からの認識は充分でない．この階段がテーマのなかで「商家の調度」の展示部分に並べられていたにもかかわらず，商家の狭い空間で置かれたことを考えにいれ，使用面を追求した文章は一つもみあたらない．これは，企画側の解説が不十分であることに原因があるのかもしれない．

「階段」のほか子供に人気のあった道具として「コビキノコ」があげられる．それについてある子供は,「でっかいオ(コ)ビキノコをノコギリのなかま」と前おきし，家庭などにみられるノコギリに比べたはずれに大きいことにおどろいている．そして「(コビキノコならば)五十センチメートル以上の（木が）切れるでしょう．あれでひょろひょろの木を切ると2, 3回動かしただけで切れると思います」と，道具を利用した場合のことを想像している．しかし，この文章から推察すると，子供はコビキノコをよこ挽きに用いるものと解釈したらしい．コビキノコは「山の仕事コーナー」の「木の利用―板のとり方」の展示部分に出展して，その使用状態を背面パネルで示している．パネルには，きこりが丸太を墨ツケの線にそってノコギリで板に挽いている図が描かれているが，子供にはそれに目をやらなかったのだろうか．この展示個所ははたて挽き，よこ挽きのちがいをわからせる工夫が必要かもしれない．

しかし，展示物を見て正しく理解している記述もある．たとえば「木馬出し」のジオラマ（図4）を見，それに付した解説文を読んで「木馬道の上にソリをすべらせて，おろして，それでは火を発(はつ)することがあるので木馬師(ばくし)は，前につるした，筒(つつ)のなかの油を枕木(まくらぎ)にぬりつつかじをとっていく」とそのことを正しく把握している．だが，展示物を理解したのち，自分なりの感想や考えを述べることはなされてはいない．

一方，ものを見たことから，あることに気づきそれより発展して自分なりの考えをつくり上げた子供もいる．ある子供は，展示した江戸末期の2つの鏡台が一方は蒔絵,もう一方は溜塗であることに注目して,「きれいな方（筆者注：蒔絵のもの）がお金持の持っている方で，ふつうの木で作ったのが（筆者注：溜塗のもの）おひゃくしょうさんが持っていたものと思った」と述べている．上記の文のなかで「お金持」に対するのは百姓であると単純に考えていることには疑問が残るが，ものから江戸期の身分制に気づいたことは特記してよい．また，その子供はつづけて「今ではみんな同じ鏡台です．やっぱり昔と今ではちがいます」と現在との対比で結んでいる．以前ほど持ちものに貧富の差がはっきりしなくなった最近の状態を認識しているといえよう．

以上，展示品についての子供の感想を披見したが，そのなかでの共通点は，前にも述べたとおりかならず「現在」と「過去」を対比させて思考するということである．その対比は，並列に扱われ，変遷としてみられていない．以前に例としてあげなかった他の感想でもほとんど同じ状態である．ただ一人「ああやったらどうだろう，こうやったらどうだろうと考えて便利な方法を作っていった」と述べているのは，特異な意見である．

しかし学校の授業では．前にあげた3年生用の副読本「わたしたちの奈良市」のなかの「くらしと楽しみ」の項目で明治から昭和期の農具の変遷が表にまとめられている．そしてそれについての指導上の留意点も前掲させたが，そこでは単に道具の新旧の比較だけにとどまらず，時代の推移と人々のくふうや努力についても考察することを強調している．その農具年表に示す「せんば」→「足ふみだっこくき」→「こううんき」の変遷は，当館展示場でも実物を使ってあきらかにしているが，残念ながらそれについてふれた子供はいない．展示で，ものの移り変りをみせ，それより時間的推移のあることを知らせて，ものを現在的な解釈におわることなく各時代の人々の心情から考察させることは，小学校4年生では不可能であろうか．ようするに「昔のくらしはとても不便だったと思う」という現時での判断から，当時の人々なりの解釈に発展する思考は要求できないのだろうか．

子供達の興味は展示物のみに終始せずに，意外なことにおよんでいる．

子供達は，展示場でみられる多くの民俗資料について「あんなにいっぱいの道具どうしたんですか」，また「おじさんたちはどうして（中略）あんなにいっぱいあつめたんですか」というような収集方法についての疑問を持

っている．これについて郷土学習室に1枚のパネルで当館オープン前の収集法を図示したが，それには目をやっていないようである．もう少しくわしく説明する必要があったかもしれない．そして，そこで民俗資料を寄贈した多くの協力者によって収集事業が可能になったことを表示すべきであろう．

また，展示の構成とその製作について関心をしめした子供もいる．ある子供は「私は，民俗博物館を見ておどろきました．それは……だってとても中がきれいなんですもの．見やすいように三つにわけてあって，それにうまいことならべてあって，それに人形まで作ってあるのだもん」と建築の内部処理と，展示構成について述べている．また，ジオラマの人形（図4）にはとりわけ関心を持ったものと思える．

人形については他の多くの子供も興味を示している．ある子供は「たけをきっているのもほんとうの人がしていると思ったら人形でした．（中略）人形を作るのには人をつかったのと思います」と小テーマ展の「カゴ屋の店先」に置いた人形におどろき，人形の製作法を考えている．この人形は子供の指摘どおり，実際に労働にたずさわる人をモデルに製作した．また，当初の展示方針どおりこれもフレキシブルなものとして，腕，腰，足の関節が自在に動くように工夫したので，展示替に際しても従来の人形を使用して，ほぼ思いどおりのポーズにつくりかえることができる．

以上のように展示構成についても興味を持つ子供がいるため，今後「展示の展示」という企画も考えられなくはない．

その他子供のなかには「無料にしてくれてありがとう」「かいぎしつまでかしてくれてありがとう」というサービス面での感想まで述べている．やはり今後も来館者への細かいこころ遣いは必要であろう．

おわりに

小稿ではまず筆者の所属する館の展示の教育的配慮を述べ，それに対する反応を小学校中学年生の観覧後の感想文よりあきらかにした．

そこでみられることは，展示品について学校の授業ですでに扱われたことから，また形のおもしろさから，かなり興味を持って見ているということである．しかし，その見方は現在との対比に終始し，ものを使った当時の人人の心情になって解釈することはなされていない．

また，展示品以外のことにも関心を示している．とりわけ人形には人気が集まりその製作法を子供なりに考えている．その他の関心は，資料収集の方法にも及んでいる．

本論文では小学校中学年層にとどまったが，順次博物館利用者の各層にわたって考察を加えたい．

末尾になったが，小稿を書くにあたってご指導を願った樋口清之博士，加藤有次教授，科学造形研究センターの職員の方々および奈良県立民俗博物館審議会専門委員の諸先生ならびに同館職員の諸氏にお礼を申し上げる．

※（よしい　たかお　奈良県立民俗博物館）